



# ハッタリ



川崎ゆきお

「物を変えると、少し自分が変わりますよ。これは自分の延長なんですよ」

「延長」

「機械や道具なんかがそうでしょ。言葉を文字に書くのは、言葉の延長。話すことの延長でしょ。そのために紙とペンが出て来た。当然、その前には木の札に書いたり、石版に刻んでいたかもしれませんが。木の札にしても、そんなもの落ちていない。木を切り取って平らにしたんですよ。これは竹でもいい。墨もインクもそうです。最初から硯があったわけじゃないし、インクもそうですよ。絵の具も。自分の爪でもいいが、大きな鳥の羽根、あれはストローのようになってますからね。だからペンになる。

「外形を変えたり、持ち物を買えたりするのがいいのですか」

「家になりますと、これは自分自身の延長じゃないかもしれませんが、雨風を防ぐ場所ですよ。洞穴でもいい。山がなければ地面に穴を掘り、その蓋が屋根になる。強引に言えば、皮膚の延長です」

「はい」

「いい家に住んでいると、それに合うような人になったりしますが、ならない人もいますねえ」

「身分不相応な、と言うのがあります。物負けとか、道具負けもありますよ」

「しかし、少し物を変えて、少しだけいいものにしてみなさい。少しだけそれに引っ張れます。物や道具類とご本人とは違うのですが、使い込んだ道具や物は自分の一部になるんですよ。延長なんです」

「冷蔵庫もですか」

「そうです。もうどこに何が入っているか、また、何処に何を入れるのかを知っている。だから、他人の家の冷蔵庫を覗いたとき、扱いにくいでしょ」

「それはただの馴染みだと思いたすが」

「冷蔵庫は家と同じで、何の延長になるのかは分かりませんが、大きな冷蔵庫の方が豊かな気分になるでしょ。食物の在庫をそれだけ増やせますからね。冷蔵庫は自分の一部と言うより、中の物はいずれ自分の一部になるでしょ。胃袋の延長とまでは言いませんが」

「先輩は何が言いたいのでしょうか」

「だから、もう少しましな服装で出社できないのかね」

「はあ」

「そんなみすぼらしい服装だから、発想も貧弱で貧乏臭い」

「ああ、そうでしたか」

「背伸びをしろというのではない。もう少しだけこましな服装はできないのかね」

「これはアンチテーゼです」

「何が、アンチだ」

「こんなアパレル系にいと、逆に目立っていいのです。これは嫌がらせです。アンチなんです」

「それも悪くはないが」

「背伸びをするのではなく、逆に後退気味に行く作戦もあるはずですよ」

「後退かね」

「先輩の説で言えば、延長ではなく縮小です。伸ばすのではなく引っ込めるのです。本来の自分と等身大ではなく、小身大ですよ」

「それが君のスタイルなら、仕方がない。そう言えるのは、私自身今まで無理をしすぎた。身分不相応な物を多く持ちすぎた。確かにそれで引っ張られて、それにふさわしい人間になれたが、これはまあハッキリで成功したようなものだが、君には当てはまらないのなら、それでもいいよ」

「ハッキリの逆を行こうかと思ひます」

「悪くはないが、良くもないと思ひますよ」

「あ、はい」

「私もこの年までハッキリ過ぎて、少し疲れたのでね。それに年を取ってハッキリを嚙まして、失敗したとき、惨めだ」

「はい」

了